

150 や わたじゆくほんじんあと
八幡宿本陣跡



指 定 市 史 跡 平成 9 年 2 月 20 日
所在地 八 幡
所有者 小松 勇夫



八幡宿は、慶長年中（1596～1614）に中山道が整備されたさいに、中山道の宿場の一つとして、周辺の蓬田村から27戸、桑山村から16戸、八幡村から20戸が移住して新たに作られたものである。

ただし、八幡宿は当初「あら町」といった。このことは、慶長7年（1602）に幕府が各宿場間の駄賃を定めた「定路次中駄賃之覚」という文書（丸山良一家蔵）に「志ほなた（塩名田）よりあら町まで、荷物壱駄四十貫目に付永楽三文」と記されていることからわかる。またこのことから、慶長7年にはすでに八幡宿（の前身）ができていたこともわかる。ただし、その後なぜ八幡宿と名称を変更したのか、またそれがいつ頃のことだったかは、まだよくわからない。

宿場は、運輸・通信業務、および宿泊業務を行なうものとして設定された。このうち運輸・通信業務をになったのが問屋で、前の宿場から送られてきた荷物などをここで積み替え、次の宿場へ送った。八幡宿には2軒の問屋があり、半月交代で業務にあたった。

他方、宿泊業務をうけもったのが、本陣・脇本陣であり、旅籠屋だった。本陣・脇本陣には、大名・皇族などが泊まり、一般庶民は旅籠へ泊まった。天保14年（1843）には、八幡宿に本陣1軒、脇本陣4軒、旅籠3軒があった。このうち八幡宿の本陣を代々勤めたのは小松家で、多数の関係古文書や関札、同家に泊まった和宮から下賜された品物などが伝えられている。また、表門も現存している。